

第1章の2

全員が楽しく「わかる・できる」授業の工夫

通常の学級において、発達障害等の特別な支援を必要とする子どもの意欲的な授業参加を進めるためには、よりよい学級集団づくりを進めると同時に、日常的な授業改善に心掛け、学級での授業を工夫していくことが欠かせません。

発達障害等のある子どもへの個別の直接的な指導・支援を考える前に、全員が楽しく「わかる・できる」授業を創造していくことが求められます。それは、学級で多くの子どもが分かる授業がなされない中であって、発達障害等のある子どもにとって「わかる・できる」授業になることはなおさら困難であるからです。通常の学級における特別支援教育を推進するためには、学級集団を意識した授業改善や授業の工夫がまず必要になります。

ここでは、全員が楽しく「わかる・できる」授業の工夫として、次の事例を挙げました。

事例4	小・生活	「自ら求め、決め出し、動き出す学習」
事例5	中・理科	「楽しい・おもしろいを切り口に理科好きの子どもを育てる実践」
事例6	中・体育	「体力・技能差を超えて、みんなが楽しむ体育」
事例7	中・数学	「ねらい・めりはり・見とどけ」を大事にした授業づくり
事例8	小・図工	「描いて満足感を感じるための支援」
事例9	小・算数	「具体的操作活動とグループ学習で思考を深める実践」
事例10	小・国語	「話すことに苦手意識がある子どもへの指導・支援」

これらの事例と各工夫点の概略を見てみますと、以下のように「全員が楽しく『わかる・できる』授業」の工夫の視点が整理されます。

- 素材の教材化 (事例4)
- 子ども理解 (事例5・6)
- ねらい・めりはり・見とどけ (事例6・7)
- 具体的・操作的・体験的な活動 (事例4・5・6・7・8・9・10)
- 焦点化・視覚化・共有化 (事例7・8・9・10)

一つの授業において、授業者によって様々な授業の工夫があり、その授業の工夫は学級集団によっても変わってくるものかと思えます。この1章の2では、発達障害等がある特定な子どものための授業ではなく、一つ一つの事例が、発達障害等のある子どもを含めた、全員が楽しく「わかる・できる」授業となるために、その授業者なりに工夫した事例を紹介します。

事例 4

自ら求め、決め出し、動き出す学習

～小2 生活科「ひつじ」の素材の教材化を通して～

2年 生活科 「ひつじさんとなかよし」

「ひつじを飼いたい」と願った子どもたちは、小屋作りやひつじの世話をすることで自分のやりたいことを決め、友だちと一緒に取り組んだり、ひつじとのかわりを深めたりしてきました。ひつじとの生活の中で、子どもたちが見せた学びの姿や育ちの様子について紹介します。

単元のねらい

- ひつじの小屋作りや毎日の世話を通して、ひつじとの触れ合いを深め、ひつじの成長を喜び、生命を大切にすることができる。
- ひつじにかかわる活動を通して、自分のよさや得意としていることに気づいたり、友だちのよさを認めたりすることができる。

〈小屋作りの姿から〉

初めてひつじの子どもに出会ったとき、子どもたちは、「かわいい」「ふわふわしている」と興奮気味にひつじを取り囲みました。「タンポポ、食べてくれた」と言っては喜び、「走った」と言っては追い掛け、一緒にいることを心から楽しみました。そして、話し合いを経てひつじを飼おうと決めた子どもたちは、小屋を作る場所を考えたり、どんな小屋にしたいか絵を描いたりして飼う気持ちを高めていきました。「ここに柱を立てよう」「この辺が入り口だね」など、小屋を建てる予定地で話し合い、ひつじにとっての居心地のよさを考えながらイメージをふくらませ、小屋作りの活動に取り組み始めました。

始めに、小屋作りに必要な木材をみんなで運びました。長い板や重い柱は友だちと力を合わせて持ちました。普段一緒に学習や活動することが難しい自・情障学級に在籍しているタカシさんやコウジさんたちも、これから始まる活動へのわくわく感から、みんなと一緒に張り切って木材を運ぶことができました。



～素材の価値～

- ひつじを飼うためにやりたいことが子どもたちの中から自然と生まれ、やりたいことやしなければならないことを自分で決めることができる。(自己選択・自己決定)
- 体を使ったり体で感じたりするなど、体を通した様々な活動が期待できる。(体験的活動)
- 小屋作りや日々の世話など、友だちと自然と協力し合って取り組むことが期待できる。(共同性)

小屋作りの活動が始まりました。子どもたちは自分でやりたいことを決めていきました。「柱を立てるために穴を掘る」「柱や板を切る」「コンパネに角材を打ち付ける」などの役割ごとグループが自然にでき、協力して活動に取り組みました。

グループに入らずホースで水遊びをしていたコウジさんが、「土を軟らかくしてほしい人はいませんか？」とみんなに声を掛けました。教師が「どうしてそう思ったの？」と尋ねると「地滑りや土砂崩れと同じ」と答えました。友だちに頼まれ、穴を掘る場所に水をかけたコウジさんは、友だちから「掘りやすいね」と喜ばれて自慢気でした。コウジさんにとっては遊びから始まった活動でしたが、仕事として位置付けました。

タカシさんは自・情障学級の担任と一緒に、のこぎりで柱を切り始めました。最後まであきらめず、自分の力で切り終わった後、「できた」と笑顔を見せました。友だちからも「タカシ君、頑張ったね」と声を掛けられ、にこにこしていました。



〈ひつじとかかわる姿から〉

「お母さんと一緒じゃないとかわいそう」という子どもたちの強い思いから、ひつじの親子2頭を飼うことになりました。小屋も完成し、ひつじとの生活が始まりました。

子どもたちは、えさをあげたり掃除をしたりするなど毎日張り切って世話をしました。散歩をする時リードの取り合いでけんかになったり、ひつじへのかかわり方が少し強引なヨウタさんやジロウさんをみんなで注意してもめたりするなど、活動する中でいろいろなトラブルも起こりました。けれども毎日かかわる中で、友だち同士「みんなもリードを持ちたいんだよ」「もっと優しくして」など伝え合うことを繰り返して、譲り合ったり適切にかかわったりすることができるようになってきました。

夏の終わり、子どもたちはお母さんひつじ（ラッキー）のふんがいつもと違うことに気づきました。固まっていたのです。更に下痢状になり、心配した子どもたちは獣医さんに診てもらおうことにしました。教師は「命にかかわる病気かもしれない」という獣医さんの言葉を子どもたちに伝えました。するとヨウタさんは、「最悪だ」と言いながら涙ぐみ、みんなが静まりかえりました。

数日後、ジロウさんは日記に、「雨の中、みんなでえさや薬をあげました。ラッキーがちゅうしゃきから薬をのみました。ぼくのばんがきました。できるかな。できました。うれしかったです」と、自分もラッキーの病気を治すために頑張れた喜びを記しました。幸い、最悪の病気ではないことが分かると、子どもたちは歓声を上げてガッツポーズをしたり、ジャンプをしたりして喜びました。



～素材の価値～

- 活動の中で友だちとのトラブルを解決するなど、社会性を身に付けていくことができる。(活動の中での社会性の習得)
- 日常的な世話や非日常的なできごとを通して、ひつじの命へ思いを寄せることができる。(命に対する畏敬の念)

事例から学ぶ

子どもたちはひつじという素材に出会ったことから願いをもち、その願いを基に様々な体験的活動を展開していきました。友だちとかかわり協力する中で、「できた」という満足感を味わったり、友だちのよさや自分の変容に気付いたりして学び、育っていきました。子どもは、自ら求め、決出し、動き出す力をもっており、それが発揮できるよう素材の教材化を行うことにより、子どもたちの確かな育ちを支えていくことができます。全員が楽しく「わかる・できる」授業とするための第一歩は、教材研究にあります。素材や教材の価値や魅力を把握し、授業を展開しましょう。

事例5

「楽しい」「おもしろい」を切り口に 理科好きの子どもを育てる実践

～中学校理科 子どもの意識の把握・分析からの授業の工夫～

「理科離れ」が叫ばれてかなりの時間が経ちました。A中学校では学校全体の子どもについて「理科が好き、大好き」の意識調査を実施してみると、1年生が全国平均と同程度の58%なのに対し、2年生、3年生は80%、84%と高い数値を示しました。そこで、子どもの理科授業の意識を探りながら、何が子どもの意識に結びついてきたのか考察・分析し、「理科好き」な子どもが増えるための授業実践を試みました。

◇ 子どもの意識調査から（2・3年生のアンケート結果の回答数の多いもの）

「楽しい」「おもしろい」と思うとき

- ・観察・実験（感動的・わくわくする・新発見・予想に反する）をしたとき
- ・結果が分からないものを、予想して実験したとき
- ・授業内容が理解できたとき
- ・テストの点がよかったとき

「つまらない」と感じる時

- ・よく分からないとき（学習内容・計算・思考場面）
- ・実験・観察がないとき
- ・結果が分かっている、ただ実験するとき
- ・テストの点が悪いとき

特に「楽しかった」「おもしろかった」授業場面

- ・液体窒素を使った実験（テニスボールが割れた・指を入れた・酸素が液体になった・液体酸素に火のついた線香を入れた）
- ・BTB溶液を使って中性の水溶液をつくる個人個人の実験
- ・気圧にかかわる風船や空き缶、沸騰等の実験
- ・二酸化炭素の中でのマグネシウムの燃焼実験
- ・酸素の中で炭素粒子の燃焼実験

【考察】

「理科好き」につながる要因として、A中学校においては全体的に、授業内容が理解できていたり、テスト点が高かったりという「わかる・できる」が一つの大きな要因であり、また、もう一つは魅力的な事象との出会いとなる「観察実験」が要因として考えられそうです。

◇ 「理科好き」な子どもを増やすために重要と考える2点

- 学力の定着（ポイントを明らかにして分かる授業を行う中で、結果としてテスト点が取れるように）
- 魅力的な事象との出会い（「予想」を大切にしながらの感動のある観察実験、実感につながる観察実験、見方考え方を新たに作る観察実験、事象に浸りきるような観察実験）

観察実験は、基本的に教科書に準じた形で行ってはいますが、子どもの意識から教科書にある観察実験よりも、やや発展的な内容として組み込んだものの方が魅力や楽しさを感じているようです。ただし、「魅力的な事象との出会い」については、既習事項との関係からなぜなのか納得できずに、時として子どもを混乱させてしまうこともあります。すると混乱が生じ

「学力の定着」が妨げられ、「理科好き」とは離れてしまいます。また、魅力的な事象との出会いを日常的に毎時間組み込むことは難しく、発展的あるいは補助的な内容に触れるときは設定しやすい傾向にあります。更に、教科書を基本とした指導内容が時間的にギリギリの状態にあって、単元の中でどこに位置付けるかは検討が必要です。

これらのことを踏まえて、単元「音の世界」について、単元の最終時間の1時間の中で、既習事項を踏まえた上で、より多くの魅力的な事象との出会いを設定し、「理科好き」につなげる取り組みを実践することになりました。

単元「音の世界」の最終時間の主眼

単元「音の世界」の基礎的内容について学習した生徒たちが、教師の問いに対して、予想し実際に実験を行ったり教師の説明を聞いたりする中で、音にかかわる様々な事象に触れることを通して、「音」への興味関心を深め、理科の楽しさに触れることができる。

本時案の概要

学習活動・学習内容		教師の問い (学習プリント)
1 単元のポイントを復習し、本時の学習内容を確認する。	3	【物体の振動と媒体】 ①ハンガーに糸をつなぎ、糸を歯でかみ、耳を閉じてハンガーを打つとどんな音に聞こえる？
2 教師の問いに対して予想し、実験をしたり教師の説明を聞いたりする。 (1)物体の振動と媒質①②③ (2)音の大小・高低④⑤⑥ (3)音と波形⑦⑧⑨	40	②紙コップにつないだばねを手で引いて放すとどんな音に聞こえる？ ③紙コップにつないだ赤いひもを爪を立て引くとどんな音が聞こえる？ 【音の大小と高低】 ④ストロー笛を吹きながら切っていくと音は？ ⑤長さが同じで細い筒を使うと音は？ ⑥ラジカセの音のスピードを上げると？
3 感想と授業・学習アンケートを記入し発表する。	7	【音と波形】 ⑦同じ高さ大きさの音で「あ」「い」「う」で波形は違う？同じ？ ⑧二つの同じ波形の音を同時に出すと波形は？ ⑨ある波形の雑音を消すにはどうする？

※ 本時のねらいを、関心・意欲・態度として、「楽しさ」を窓口に授業を展開します。

そのため、一時間の中で、より多くの「魅力的な事象との出会い」に力点を置き、その展開を試みます。この授業や単元の評価については、子どもからの授業評価やテスト結果から、理科の楽しさに触れたか、学力の定着はどうかを振り返ることになりました。

◇学習の様子1 (学習プリント③ 時間は約6分の場面)

教師「では次。机上のボックスに入っている赤いひもがついた紙コップの実験だよ。見て。紙コップをこう持って、この赤いひもに爪を立てて引っ張る。さあどうなるだろう。学習プリントの当てはまると思うものに○をして」

生徒 (学習カードに○をする) 15秒程度
 教師 「じゃあ、「ギューッと大きい音」がすると思う人はグー。「キューと高い音」はチョキ。「英語が聞こえる」人はペア。はい、グー、チョキ、パー、一斉に表示。」

生徒 (全員が挙手。グーが13人、チョキが18人、パーが3人。パーを挙げた生徒の一人タロウさんは、笑われ、頭をかいている)

教師 「じゃあ、実験してみよう。時間は3分間。10時5分まで。では、はじめ。」

生徒 (4人一組のグループごとに席を立ち開始。グループごとにつぶやきが聞こえてくる) 「あれ、大きい音?」「なんか、音が高くなったり低くなったりしない?」

「今、英語みたいに聞こえなかった?」「そんなはずないよ」「え、何か言ってる気がする」「え、そんな風には聞こえないよ」

教師 「はい、やめー」

生徒 (席に座る)

教師 「どうだった?」

生徒 座ったまま、あちらこちらから、「大きく聞こえた」「なんかリズムが変わって分からない」「グッドモーニングって聞こえた」「うそだあ」等。

教師 「グッドモーニング? ほんと? じゃあ、やってみるから、みんなよく聞いてみよう」

生徒 教室がシーンとし、皆が音に集中する。示範実験。

「あっ、グッドモーニングって言った!」「英語だ」「聞こえる聞こえる」「うそー」「なんで?」

教師 「そう、正解は英語。トークンテープって言うんだ。赤いテープ、ギザギザしてるでしょ。爪を立てて引いたときその振動が英語に聞こえるんだね。不思議だよ。タロウ君、予想、合ってたね。じゃあ次は、④の実験だ」

〈工夫点1〉

表現せざるを得ない場面の設定

「分かった人?」「できた人?」と投げかけると、授業に参加しない生徒が出やすい。全員が一同に挙手する場面により、全員の授業参加を促す。

〈工夫点2〉

つぶやきを拾い、広げる

問いを投げ掛けたら、生徒のつぶやきに耳を傾ける。そして、そのつぶやきを取り上げ、全体に広める。この場面では、挙手のような形をとらず、気軽に表現できる雰囲気をお大切にして授業を展開した。

◇学習の様子2 (学習プリント⑨ 時間は約5分の場面)

教師 「⑦⑧では、オシロスコープで音の波形を観察したね。では⑨、最後の質問。ある波形の雑音が気になる。その音を消すにはどうしたらいい?」

生徒 「……………」(15秒程度)

教師 「間違えても構わない。気軽に言ってみて」(2人が挙手)

教師 「ジロウ君。」

生徒 「耳をふさぐ」(周囲から笑い声)

教師 「いいねえ。音を遮断する。他に、アキヨシ君」

生徒 「もっと、でかい音を出す」(周囲から笑い)

教師 「なるほど、そうすればその雑音は気にならなくなるね。おもしろい。ほかに、ないかな。この波形の雑音を消したい。さあ、どうだろう。あっ、ハナコさん」

生徒 「その雑音の波形と逆の波形の音を出せばいいと思います」

生徒 (周囲の生徒は目を見開いた反応で、少し驚いた様子)

教師 「そんなことできる? その音と逆の波形の音を出すなんてこと。……。でも、確かに、

先ほどの実験からして、逆の波形の音を出せれば、消えそうだよね。」

生徒 (多くの生徒がうなづく)

教師 「実は、これ(ヘッドホンを取り出す)、ノイズキャンセラと言うんだ。実際に逆の波形の音を出すことにより、雑音を小さくしているんだ」

生徒 「へえー」と身を乗り出す

教師 じゃあ、実験してみよう。一つしか用意できなかったから、誰かにやってほしいけど」

生徒 「はい」と8名ほどが挙手。

教師 「ごめん、ジャンケンの時間ないから指名するね。シンさん」

生徒 (シンさんが嬉しそうに前に出てきて、イヤホンをする)

教師 「はじめに、雑音流すよ。今も聞こえてるでしょ。(シンさんはうなづく) じゃあ、ノイズキャンセラのスイッチを入れると？」

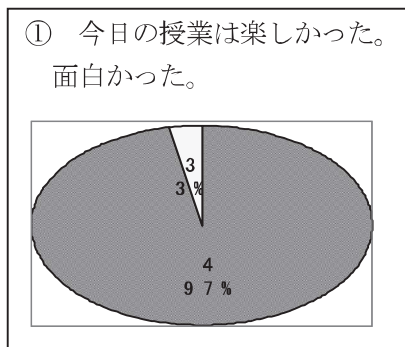
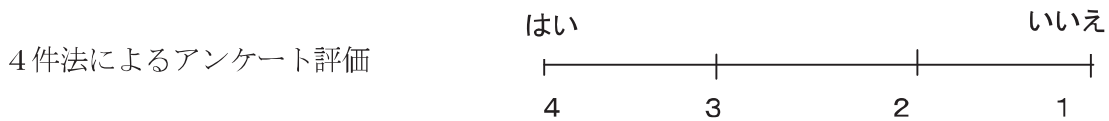
生徒 「あっ、小さくなった」(周りの生徒から、「ほんと」「いいな」「やらせて」等)

教師 「音を音で消す。この技術がヘッドホンにも活かされ製品化されているんだ。音の世界も奥が深いね」

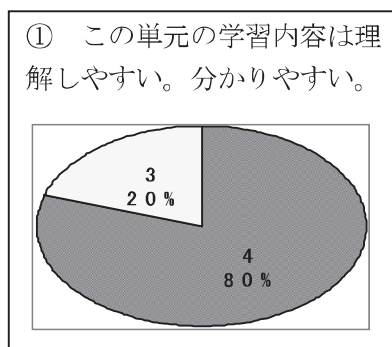
**〈工夫点3〉
実生活につなげる**
学んだ原理や法則が、単に知識にとどまっていたは活きない。原理が実感できるよう、実生活との結び付きを意識する。

◇ 本時及び単元を振り返る

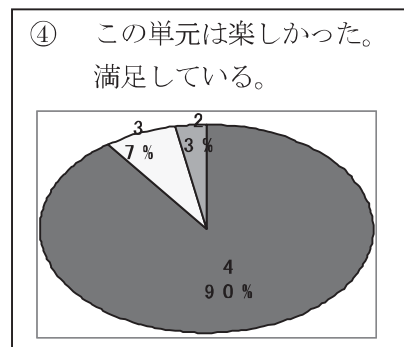
(1) 本時の振り返り用紙、及び生徒による単元の授業評価より



【本時の振り返り用紙より(抜粋)】



【単元「音の世界」の授業アンケートより(一部抜粋)】



本時の授業を楽しかったと感じた生徒「4」は97%であり、ねらいは達成できたと考えられます。また単元評価を見るに、前単元「植物の世界」と比べ、「4」が15~20%ほど上がり、授業理解や満足度、その他、集中した取組等の項目の上昇が見られました。

(2) 単元テスト及びCRT検査の結果より

単元テストの結果を見ると、前単元の平均点75点に比べ、82点と全体的に高い得点となりました。また、前年度のCRTの小問分析「音の世界」にかかわって、全国通過率が70のところ、前年度と比較し、53→88へと大きく上昇しました。

事例から学ぶ

その教科の楽しさ・面白さとは、子どもにとって何でしょうか。その教科の楽しさを子どもの姿や意識から考えることで、教科の必要感や本質が見えてくるように思います。一時間の授業は当然大切ですが、それ以上に、その教科における子どもにとっての「学ぶ喜び」、教師にとっての「教える楽しさ」という視点から、学習全体を展開する中で、全員が楽しく「わかる・できる」授業につながっていくように感じています。

事例6

体力・技能差を超えてみんなが楽しむ体育

～中1 保健体育「卓球」単元での工夫～

中学校の体育では、技能差が大きく、運動が得意な子どもと苦手な子どもによって授業の参加の様子が異なってきます。前単元のバレーボールでは、球技を得意としている子どもばかりにボールが集まり、苦手な子どもはあまり楽しめない様子が見られました。

そこで、これまで技能の向上を第一に授業づくりをしてきたイチカワ先生が、「全員が楽しむ体育」へと視点の転換を図りながら取り組んできた「卓球」の実践を紹介します。

◇ 運動に対する教師の視点の転換

「卓球」といえば、「相手の取れないスピードボールを打ち込んだり、返球しにくい所へ変化させて打ったりして、得点を争う競争型」だと考えられがちです。しかし、イチカワ先生は、これでは技能の高い子だけが楽しみ、技能が高くない子は、なかなか楽しむことができない傾向があると感じていました。また卓球は、個人スポーツとして、個々がそれぞれ運動を行うことになり、仲間と協力して運動を行おうとする態度面が育ちにくいとも考えました。

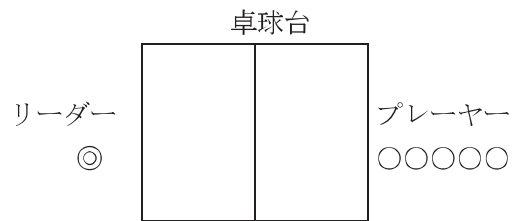
そこで、卓球を一般的な「個人競争型」ではなく、「集団達成型」として教材化（連続ラリー卓球）し、次のように単元を計画しました。

<工夫点1> 子どもの実態に合わせた ねらいの設定と教材化

卓球の授業のねらいを個人が得点を競う「個人競争型」ではなく、班でラリーを続ける「集団達成型」として教材化する。

単元のねらい

- 基本となる用具操作や構えなどを知り、ボールやラケットの操作に慣れる。
- 味方が操作しやすい位置にボールを返球することができる。
- チーム毎に協力し、目標とする回数や時間の途中でラリーを続けることができる。



【卓球台とプレイヤーの位置】

◇ 教材「連続ラリー卓球」の価値

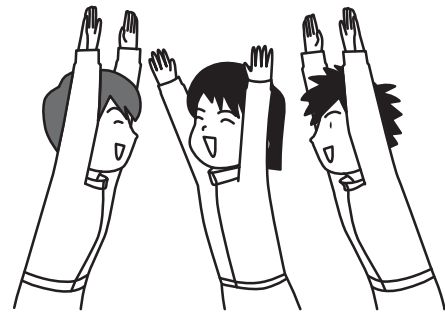
子どもたちは6人で1グループとなり、1人がリーダーとして固定位置でプレーします。

あとの5人が、一回打つごとに次の仲間と交代し、ローテーションしながら返球をしていきます。チーム内で目標を設定し、連続で打ち続けることをグループで協力しながら行います。ゲームに慣れてきたら、子どもたちの実態に応じて目標回数を増やしたり、時間内で何回連続して打てるかをグループ間で競争したりすることもできます。

単元の展開

- 1 ラケットとボールに慣れよう 【1時間】
 - ・ラケットとボールを使って自由に打つ
 - ・ラケットやボールの操作に慣れる
 - 「卓球リフティング」「連続壁打ち」「ペア床ワンバウンド打ち」など
- 2 「連続ラリー卓球」を知ろう 【1時間】
 - ・「競争型」ではなく、「集団達成型」としての運動のねらいやルールなどを理解し、単元の見通しをもつ
 - [ルール]
 - ・1チーム6人
 - ・1人がリーダーで、5人が反対側で返球する毎に交代する
 - ・チームの目標回数を決め、それを目指して返球した数をみんなで数える
- 3 集団卓球1をしよう（めあて1：各チームで、目標回数に向けてラリーを続ける） 【2時間】
- 4 集団卓球2をしよう（めあて2：一定時間内に連続で何回ラリーが続いたかを競う） 【2時間】

まず始めに、連続13回返球することができた1班は、チームで話し合って50回という目標回数を立て、大きな声で数えながら練習していきました。しばらくして、「・・・49、50！イエーイ！！」と、大きな歓声が上がリ、チーム全員がハイタッチをしている姿が見られました。



この班は、何度も何度も練習を繰り返シ、話し合う中で「相手コートの中へ相手が返球しやすいボールを返せば、続けることができる」ということを共通理解していったようです。また、ねらった所に返球するためのラケットの角度にも意識が向き、ラケットの真ん中でボールをとらえる技能も高まっていきました。

◇ 用具の工夫

この単元では、用具の工夫も行いました。

普通の卓球ボールを使ってラリーをすると、ボールのスピードが速く、回転もかかってしまい、大きく変化します。そのため、運動技能が高くない子は、返球することが難しくなります。用具の操作が難しいと、状況を判断したり思考したりすることも難しくなります。

そこでイチカワ先生は、ボールを一般的に使用されているボールから「ラージボール」に変更することにしました。このラージボールは、普通のボールよりも大きくて軽いボールです。そのため空気抵抗が大きくボールの速度がゆっくりとなり、ラケットでとらえやすくなります。そして、単

<工夫点2>

操作しやすい用具と

十分な練習時間の確保

・運動技能の高くない子どもたちのために、操作しやすいラージボールを使用し、ボール慣れの時間を十分に確保する。

元の始めに、ラケットやボールに慣れる時間を位置付けました。

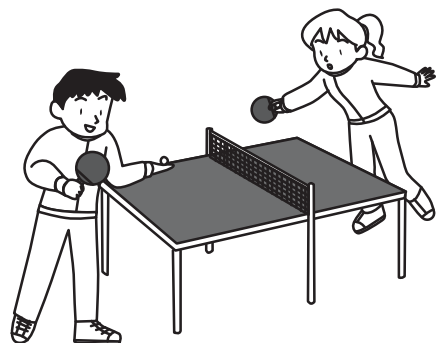
すると、ラケットを使ってボールを正確にとらえることが今まで苦手だったカズヤさんも、初めからボールを返球することができました。グループの仲間からも、「上手に返せるようになって、うまくなったよ!!」と言われ、ガッツポーズする姿が見られました。

◇ ペア学習の取り入れ

イチカワ先生が、一番大事に考えて工夫したのは、「ペア学習を取り入れること」でした。運動技能は高いが、自分のペースで運動を行うことが多いアツシさん。前単元のバレーボールの授業では、技能の高い仲間ばかりでプレーすることを作戦の中心に据え、少人数で楽しむ姿が多く見られました。このような中で、同じクラスの運動を苦手とするマナさんは、どうしても積極的に運動を楽しむことはできませんでした。

しかし今回は、イチカワ先生より「個人競争型」ではなく、「集団達成型」をねらいとすることがオリエンテーションで話されました。そして、イチカワ先生は、グループのリーダーであるアツシさんと呼んで、「一人一人が大切になる」ということを直接本人に話しました。

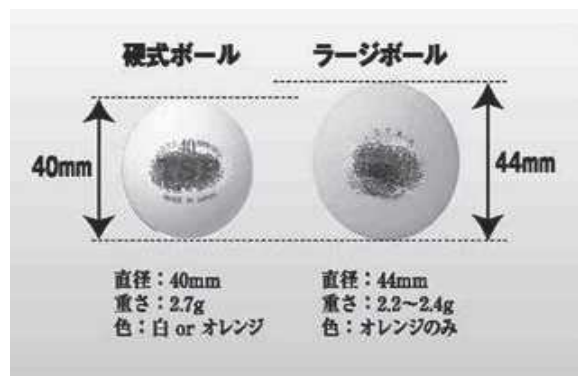
すると、アツシさんは、「俺と一緒にやろう」と自分から同じグループとなった運動の苦手なマナさんに声を掛け、ペアとなって練習をしていきました。更に、アツシさんは、失敗しても「ドンマイ、ドンマイ。もっと、ラケットを押し出す感じで・・・」と、丁寧にマナさんにアドバイスしながら練習していく姿が見られました。



事例から学ぶ

球技は子どもたちが好きなスポーツですが、既存のルールのままゲームをすると、得意な子どもばかりが楽しみ、苦手な子どもはボールに触れにくい状況が生まれてしまうことがあります。体育の授業において技能の向上を目指すことは必要ですが、まずは一人一人の子どもが運動を楽しめるような工夫が大切になります。

全員が楽しく「わかる・できる」授業となるために、分かるようにする・できるようにする前に、子どもの実態を把握して、一人一人が楽しく授業に参加できるようにしていきたいものです。



<工夫点3>

授業のねらいを理解させた上でのペア学習の設定

子どもたちが、集団達成型とするねらいを十分に理解した上で、同じグループの中でペア学習を設定する。